



待望の一冊！感想に代えて。

名古屋大学災害対策室長・教授 鈴木 康弘

自称「レーザ計測ファン」として、最新刊の感想文を書かせていただける榮譽に預かり、大変うれしく思います。

私は約10年前からデジタル航測技術の進歩の速さに驚かされ続けてきました。当時、コンピュータのデジタル測量図化システムにより、3D画像の中に等高線が自動的に描かれていくのを初めて見たとき、これで地理学（人類の地形理解）は変わる！と思わず叫んでしまい、その地形モデルがクルクル回るのを見て、フライトシミュレーションの面白さにすっかりハマりました！

その後、レーザ計測が主流になって、地表の対象物をくっきり描くことができるようになり、DSMとDEMが別々に作れると聞いた時には、なんと素晴らしいアイデアなんだろうかと興奮したことを今でもはっきり覚えています。テレビ等で“Virtual Reality”のグラフィクスがもてはやされた頃も、そんなVirtualな世界には興味のない私は、レーザ計測データを使った“Actual Reality”をはやらせたいと思い、2005年の愛知万博当時にあちこち提案したこともありました。実際に測ったデータによって作られる世界には、人間の軽薄なイメージで作ったCGとは全く異なる神秘性や複雑さがあり、それが郷土の姿だと思ふとき、愛着も強く感じたからでした。

残念ながら“Actual Reality”などという言葉ははやりませんでした。が、“環境との共生”を謳った愛知万博の頃には、名古屋の航空測量会社の方々と、会場予定地周辺の森林（樹冠）の高さをレーザ計測で測り、航空写真で計測した50年前のデータと差し引きし、二酸化炭素固定量を算出することを目指したりもしました。また最近、活断層が過去にどのようなズレを繰り返してきたか、その一ページずつを地形・地質学的に解説するために、活断層沿いの数十センチ間隔のレーザ計測も

行ってきました。得られるデータが作り出す地形モデルは複雑で、その解読はまだまだこれからです。

これまで私は、この世界の技術に関する知識をすべて親しい専門家から口伝で教えてもらってききましたが、このたび出版された「図解航空レーザ計測－基礎から応用まで－」には、最初から最後まで一気に読みたくなる魅力を感じました。なんと言っても綺麗な写真やわかりやすい図が多いことは魅力です。

また、空間計測の歴史からはじまり、基礎原理、作業の流れ、計測精度を教えてくれる第1～2章。実際のシステムやその運用法を解説してくれる第3～4章。計測後のデータ解析や画像処理の方法を教えてくれる第5章。出力方法やグラフィクスに関する第6～7章。…こうした流れは、全体像を理解するための解説書として理想的です。第8～9章では応用例や最新の解析技術が紹介され、その面白さにひきずり込まれます。また、課題と展望が纏められた第10章を読むと、「レーザ計測ファン」の私としては、今後の10年にますます大きな期待を抱かないわけにはいきません。

一般の方向けの講演会などでレーザ計測の絵を紹介すると、必ず多くの方が感動され、ため息を漏らされます。こんな魅力的なレーザ計測の世界を、専門業界や私のような一部のマニアだけのものにしていってはもったいない！

今後は、この面白さを多くの方にも伝えられたらと思います。DSMには私たちの「生活」そのものが写っています。ある時点の記録という意味で、「歴史」も写し取られているとも言えます。地域の自然環境を大切にしたり、その中での自然な生き方を考えたりする上でも楽しく役に立つグラフィクスを作ることができるのではないのでしょうか。一般の方も楽しめる世界が、この本の出版を機に、ますます広がりますように。